

「2017冬、沖縄平和の旅」紀行文 TOZSUN

12月9日(土) 1日目

米軍基地問題で困惑している沖縄県民を支援するツアーが、この冬多数企画されています。埼玉AALAでは、有名な見学地はもちろん、あまり知られていない場所の掘り起こしをと思い企画をしました。しかし、残念ながら10名の参加者でした。この少なさが、説明をたくさん聞くことができたので、最後には感動に変わりました。現地添乗員兼ガイドの横田さんには感謝でいっぱいです。

最初に訪れたのが、那覇市内の「対馬丸」記念館です。昭和19年(1944年)戦争の足音が身近に近づいてくると、老・幼・婦女子は県外へ疎開するように指示されました。「対馬丸」は学童集団疎開の子供たちをたくさん乗せて8月21日に那覇港を出航しました。しかし、海はすでに戦場でした。「対馬丸」は翌22日夜10時



過ぎ、米潜水艦ボーフィン号の魚雷攻撃により鹿児島県悪石島付近の海に沈められてしまいました。乗船者1788名(船員・兵員含む)

のうち約8割の人々が海底へと消えてしまいました。乗船した学童834名の中で約8割の児童たちが犠牲になりました。ここには、子どもたちの写真が展示されています。犠牲になった数の多さに比べて、残された遺品や遺影がとても少ないですが、犠牲者が生きた証であるだけでなく大切な家族やお友達を失った人々との大切な思い出が詰まった展示室です。未来へ伝えたい平和への想いということで漫画本「対馬丸」ができました。悲惨な事件をわかりやすい絵で説明しているこの本を広く普及させたいものです。疎開船「対馬丸」で犠牲になった子どもたちの資料館「対馬丸記念館」へぜひ足を運んでください。

那覇市から宜野湾市に入ると左手に「普天間飛行場」が見えてきます。手前のフェンスのすぐ奥に新しいフェンスが建てられていました。その間隔の狭さは道路の拡張としか思えません。これで返還したと言うのでしょうか。その奥の建物は前回来たときにみた建物と違って新しくなっていました。「普天間飛行場」は、宜野湾市の真ん中にあるので事故が多発していたということで、アメリカ軍と日本政府は基地返還の約束があったはずですが、それにもかかわらず新しく建て替えられているとは、不思議なことです。その気はないのでしょうか。これら全て日本の思いやり予算(私たちの税金)で建てられています。

普天間基地の東端にある民有地の一部(返還された場所)に佐喜眞美術館があります。周りを普天間基地の金網で囲まれています。この美術館は丸木位里・丸木俊共同製作の「沖縄戦の図」が常設展示されています。撮影

不可だったので写真がありませんが、解説の方の説明をきくと、沖縄戦の様子が見事に描かれていて、戦争の恐ろしさを感じました。



佐喜眞美術館を入ってすぐの廊下の壁に照屋勇賢さんの作品「結い、YOU-I」が飾られていました。琉球紅型の着物ですが、拡大してみると、ジェット機やヘリコプター、パラシュートで降りる兵隊などたくさんの戦争の図形が模様となっていました。2002年の作品ですが、着物の裾の方にオスプレイが飛んでいます。

宜野湾市の真ん中にアメリカ軍海兵隊の普天間飛行場があります。この美術館の屋上に特別に上がらせてもらいました。この階段の先端部分に丸い穴があいていて、沖縄慰霊の日(6月23日)の夕陽がそこからさしてくるようになっているそうです。この屋上から見た普天間基地を見ました。多くの森に囲まれているこの土地は宜野湾市民の土地を取り上げて作ったものです。人々は戦後収容所から帰ってきたとき、自分の家と土地がなくなっているのに絶望したが、仕方なく普天間基地の周辺に家を建てて住んでいるそうです。佐喜眞美術館の周りを普天間基地の金網が囲っています。金網の内側に沖縄の人の亀甲墓がいくつか見られました。お墓参りのときはアメリカ軍に許可をもらって入るそうです。

12月10日(日) 2日目

最初の見学地は「大本营直結のゲリラ部隊、護郷隊の碑」です。名護小学校の校門の横の急な階段を上がって行くと少年護郷隊についての碑がありました。名護にあった県立第三中学校の鉄血勤皇三中隊(兵隊と同様に戦闘を行う)から第三遊撃隊(護郷隊)の一員として北部戦場のゲリラ戦へと駆り出されて行きました。「隊員は国頭郡に在住する17歳18歳の第二国民兵を防衛召集により充当し、遊撃戦遂行に必要な戦技を付与・・・」(碑文より一部抜粋)、そして多くが戦死したので「少年護郷隊」と言われています。

そして、現在の闘い(米軍基地反対闘争)の最前線の辺野古のテント村に来ました。テント村での座り込みは約5000日になるということです。非暴力の粘り強い闘いです。埼玉AALAから寄せ書き「檄」を手渡しました。大学の教育学部のゼミの生徒さんたちと一緒に、テント村で現地の方から説明を聞きました。大学生たちが熱心に聞いている姿に嬉しくなりました。テントの横に書いてある「勝つ方法はあきらめないこと」に胸を打ち

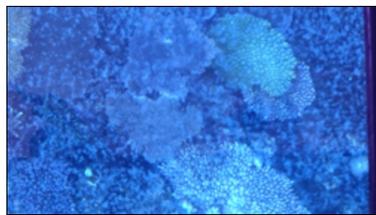


ます。テント村から少し離れた辺野古ビーチに向かいました。ビーチを横切るようにキャンペーンシュワープの金網が張られています。金

網には辺野古闘争を支援している団体の幟布が所狭しに飾られています。

「わんさか大浦パーク」という道の駅に立ち寄りました。日差しが強くて暑くなってきたので、みんなはブルーシールアイスクリームを買っていました。

その後、汀間（ていま）漁港でグラスボートに乗船しました。汀間漁港を出港したグラスボートは、大浦湾を南に進み、湾中央にある珊瑚礁に向かいました。この珊瑚礁のすぐ西側全体が「常時立入禁止区域」になっており、フロートフェンスで囲まれています。この部分はかなり深い海になっているので、アメリカ軍は「普天間飛行場基地を辺野古に移設」と言っているが、どうも実態はここに軍港を新設することが狙いのようです。アオサング群落（チリビシ）とハマサング群落の透明な海をグラスボートの上から見ることができました。このような大規模な珊瑚礁が基地建設によって消えて行こうとしているのは許すことはできません。今のアメリカと安倍



政権の自然や文化を蔑視する政治はいつかしっぺ返しがかかることでしょう。

私はこのグラスボートの前方に座っていたので、潜水夫のような黒い頭と

体が見えすぐ消えていったのを見たのですが、写真を撮りそびれてしまいました。ジュゴンかなと思いましたが、同じく見た人の話では、大きなウミガメだったと言っていました。大自然の海を感じました。

長寿の村「大宜味村」の道の駅で昼食をとりました。パイナップルが売っていたので、食べたいと思ったら、切ってくれたので、美味しくみんなでいただきました。お土産に「ゆず昆布 味きらり」をたくさん買いました。

道の駅に隣接して「ふるさと食堂（農山漁村食堂）」があり、そこで昼食です。シークワサー入りのさっぱりしたお水が出たのにはビックリです。ここで、長寿の食事「味噌汁定食」を食べました。普通の定食についてくる「みそ汁」ではなく、「みそ汁」がメインです。店によって違いがあるそうですが、この店では大きな丼に、島豆腐4つ、豚肉、上に卵、野菜は少な目でした。ボリュームたっぷり栄養たっぷりのメニューです。大満足でした。

出発時間まで少し時間があつたので、店の前の海岸を見に行きました。



根路銘海岸と言います。海岸沿いに生えている樹木の根が変わっているので気になりました。根っこの一部剥がれているところを見ると、細い繊維の束でできていました。帰宅後名前を調べてみると、「オガサワラタコノキ」と言うそうです。周りに落ちているのが、この樹木の実です。大量にありました。

大宜味村の9条の会の方が乗車していただき、東村の

高江のテント村へ向かいました。テント村の前で、埼玉AALAから寄せ書き「檄」を手渡しました。ここで、本「沖縄・高江 やんばるで生きる」



（写真：森住卓、解説：三上智恵）を購入しました。オスプレイパッドの基地建設により大自然に被害が出ています。日本人の警備員でガードされているゲートには、2年前訪れた時はテント村がありましたので、この2年間の間に激しい弾圧があつて反対側に移されたのだと思います。このゲートの右側の金網のそばに登れる小道がついていましたので、みんなで登りました。金網越しにゲート内の道を撮影しましたが、なんの道だか分かりませんでした。家に帰ってからインターネットで見ると、この奥左側に大きな四角形の目隠しが2ヶ所表示されていました。本当の目隠しとは思えませんので、インターネット上に工作をしたものかと思われます。今日の新聞で、米軍施設上空でドローン「規制を」と米ハリス司令官が小野寺防衛相に要請という記事が載っていましたので、これだと思いました。



同じ場所から反対側の山原（やんばる）を撮影しました。

写真にはあまり写っていませんが、右手に「与那覇岳」があります。やんばる国立公園

内にある沖縄本島における最高峰で、標高は503mです。そのほとんどをアメリカ軍北部訓練場として爆撃練習を繰り返しています。この山原にはスタジイ（イタジイ）という縄文人の時代から食料としてきたドングリがたくさんとれる自然豊かな森となっています。しかし、その森も今では瀕死の重傷化しているに違いありません。

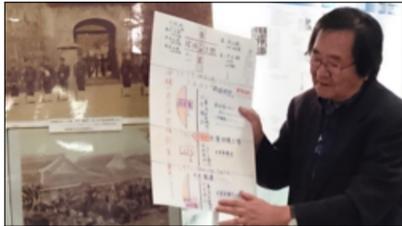
「座り込みガイドライン」という看板が目に入ってきました。そこには、次のように書いてあります。「私たちは非暴力です。コトバの暴力を含め誰もキズつけたくありません。自分の意志で座り込みに参加しています。誰かに何かを強られることはありません。自分の体調や気持ちを大切にトイレや食事などではなれる時は周りの人にひと声かけて下さい。トランシーバーやケイタイを活用してムリのないように！いつでも愛とユーモアを」（ヘリパッドいらぬ住民の会）

解説をしていただいた大宜味村9条の会の方を送りがてら那覇へ向かうということで、同じ道に戻る予定でしたが、北端の辺戸岬へ通じる県道70号線を北上し、途中で左折して県道2号線（与那安田横断道路）で国頭村（くにがみそん）与那に抜ける道を通って大宜味村に行くことになりました。北端近くまで行けたので嬉しい限りです。また、9条の会の方から国頭村の問題（辺野古埋め立ての土砂を海上輸送する港反対闘争）も色々聞くことができ、大周りしただけの価値はありました。

12月11日(月)3日目

最初の見学地は、那覇市内の「不屈館」です。2年前も訪れているので、ここでは、ビデオを中心に拝見しました。これから日本各地で上映される予定のドキュメンタリー映画「米軍が最も恐れた男 その名は、カメジロー」(佐古忠彦：初監督作品、坂本龍一：オリジナル楽曲、大杉漣：語り)があります。その元になったTBS製作の「米軍が最も恐れた男～あなたはカメジローを知っていますか?～」を視聴することができました。これも感動の作品です。ビデオ「教えてよ亀次郎」と「不屈Tシャツ」を購入しました。

続いて、那覇市内の琉球新報博物館の見学です。「日本復帰45年の現実」のコーナーでは、新聞を使って沖縄で起こった基地問題事件などを展示してありました。博物館の方が、自作の表を見せながら沖縄の歴史を説明してくれました。1879年(明治12年)までは琉球王国として自己決定権を有していた。この年日本併合「琉球処分」により沖縄県となったが、その後の66年



間は実質的に自己決定権を有することはできなくなっていた。後ろの写真は、首里城を占領する明治政府軍が写っている貴重な写真だ。

1945年(昭和20年)以降は米軍占領によって米軍事優先の下に27年間自己決定権がなかったため、土地を勝手に取り上げられ、基地をたくさん作られてしまった。1972年(昭和47年)5月15日に日本復帰を果たしたが、米軍と日本政府による密約(日米地位協定)により、その後45年(現在時点)も自己決定権がなおざりにされ、米兵による殺人事件もうやむやにされ続けています。アメリカ軍は、植民地時代さながらに現在でもなお「占領意識丸出し」で事に当たっていることが新聞から見て取れます。日本本土では過小評価の記事しか載っていません。残念なことです。米国に頭が上らない政権中枢の現れですね。

第二次大戦末期、沖縄上陸の様子を撮影した写真を見ることができました。アメリカ軍の物量の大きさをまざまざと見せつける写真です。日本軍中枢の暴力的精神論では逆らえない現実があります。日本軍中枢が「本土決戦」への時間引き延ばしや「天皇制護持」の和平交渉の道を探ろうとして、沖縄「捨て石作戦」を取らなければ、本土から来た兵隊約66000人と沖縄の徴集兵隊約30000人と沖縄民間人約94000人と朝鮮半島から強制連行された軍夫や「従軍慰安婦」の約10000人の合計約20万人の尊い命が失われずに済んだことを思うと、日本軍部政権の罪を感じざるを得ません。

米軍占領下の27年間の「米軍人権軽視の事件」を一覧表にしたボードがありました。占領下でのやりたい放題は、日本軍の台湾・朝鮮・満州・南京などでも起こし

たことだと推察できます。人間の性(さが)なのでしょう。か。「人を支配することによる暴力」はいつ無くなるのでしょうか。ぜひ、地球が滅びる前に実現したいものです。

新聞社の博物館ですので、印刷技術の変遷も展示されていました。私自身「情報」を伝達する印刷などの技術はとても大事なものだと思います。それも正確な内容を大量に伝達していくことの大事さを感じています。コンピュータや電動印刷機も必要ですが、電気が無くなった時に活躍する活版印刷に興味があるので、今回はたくさん写真を撮影しました。



昔の新聞は、活字を活字棚から拾ってケースに組み上げていき、そこでステロ版という紙型を作り、それで大量の紙に印刷していく方法を取っていました。この活字を作るには、鉛が約80%、アンチモンが約15%、錫が約5%で合金の地金を作って母型に流し込み作製していたようです。

琉球新報社の社是と編集綱領があったので、社是を書き写してみると、1. 不偏不党、報道の自由と公正を期す。1. 沖縄の政治、経済および文化の発展を促進し、民主社会の建設に努める。1. 国際信義にもとづき、恒久世界平和の確立に寄与する。の3つです。日本本土の新聞では見かけない「沖縄基地反対に賛成する海外知識人」という紹介新聞には驚いた。世界の知識人たちにも、沖縄の米軍基地の不当性が伝わりつつあるのを感じることができた。「世界へ繋ぐ沖縄の声と心」と題してオリバー・ストーン(映画「プラトーン」の映画監督)やゴルバチョフを沖縄に招き、講演会を開催した記事が掲載されていました。

昼食後、高速道路に乗り、石川ICで降りた後、うるま市(旧石川市)の石川出張所で、宮森630会の方の説明を聞きました。1959年(昭和34年)6月30日午前10時40分ごろ、米軍のジェット戦闘機が宮森小学校に墜落しました。宮森小学校の手前の民家に墜落し住民6名が死亡。ジェット燃料を撒き散らしたため大火災が発生し、ジェット機が大きくバウンドした下にあった木造の2年3組の校舎が全焼し、生徒6名が死亡。木造の4年1組の教室の屋根の瓦を吹き飛ばした後、コンクリート校舎の2階部分にある6年3組の教室にエンジンが飛び込み、生徒3名が死亡。ブランコにいた3年生1名と水道前にいた4年生1名も死亡しました。重軽傷を負った児童は156名、一般の方は54名という大惨事でした。体到大火傷を負った2年生の一人は、後遺症が残り大学生



の時に亡くなったそうです。米軍嘉手納空軍基地を飛び立ったジェット戦闘機は東シナ海上空で故障を感知し、右回転で残波岬を通り越し、再び嘉手納飛行場に不時着降下を試みたが、コントロールがすでに困難となり失敗。今度は陸地を左回転で2回目の不時着を試みようとするが、具志川上空で火災発生、その後爆発したため、パイロットは脱出してしまった。そのため、コントロールが全くできないまま石川市の宮森小学校に墜落してしまう。真栄田岬方面であれば被害が抑えられたが、人口密集地の石川市に向かってしまった。基地に隣接する街の絶え間ない恐怖がここにある。当時の写真が掲示されていた。

その後、直接宮森小学校を訪れた。慰霊碑。ここで毎年6月30日に慰霊祭が行われている。50年目にして遺族が語りました。50年経って教師が語りました。50年間閉じていた同窓生が語りました。証言集やドキュメンタリー映画「6.30」をぜひ読んでみてください。忘れてはいけない大惨事です。

この日最後は、同じうるま市（旧具志川市）昆布で、米軍占領下時代の1965年12月に始まった米軍による約2万坪の土地接収



に反対する闘争が起こった場所だ。「一坪たりとも渡すまい」の歌が作られた場所だ。米軍はここをベトナム戦争の軍需物資の集積所として利用する計画であったが、1971年に米軍は接収を諦めた。

12月12日（火）4日目

最終日は「ひめゆり学徒隊をたどる」と題して、その逃避行の後を順に追って行きました。最初に訪れたのは、南風原（はえばる）文化センターです。1944年3月に第32軍が沖縄守備軍として配置されると、その年の12月には男子学徒は兵隊と同じように戦う「鉄血勤皇隊」として配置され、女子学徒は看護教育を受け「看護要員」として動員されることになった。沖縄師範女子部と県立第一高女は「ひめゆり学徒隊」（222人）として、南風原国民学校（今の小学校）を改造した沖縄陸軍病院の看護補助要員として1945年3月24日動員された。南風原の沖縄陸軍病院（広池文吉：軍医中佐、病院長）は首里城の南に位置し、交通の要所でもあった。この絵の右側全体が「黄金森」と呼ばれる丘陵地である。ひめゆり平和祈念資料館で購入したDVDアニメ「ひめゆり」（梅津 研：原画・構成、安里かれん：ナレーション）を見ると、最初の移動は遠足に行くような感じだったよう



だ。外科、内科、伝染病科の3つの科があり、比較的若い民間の医師や看護婦も召集され、医師は軍医として厳しく鍛えられたよう

だ。のちに、全て外科の名称となり、第一、第二、第三がついた。

戦局が悪化し始めた1944年9月3日から「黄金森」に横穴式の病院壕掘られ始め、1945年3月23日沖縄本島上陸に向けた米軍の艦砲射撃が始まると、陸軍病院は各壕へと移っていった。ここから分かるのは、「ひめゆり学徒隊」は早い段階で国民学校の病院から壕内の病院へ移ったと思われる。そこで目にしたのは、南風原文化センターに再現している「沖縄陸軍病院南風原壕群内部」で、その様子を知ることが出来る。浦添、首里方面で大空襲があり、負傷兵が1日70人から100人も送られてくると、2段の棚でできた壕の中のベッドには血だらけの人々であふれかえった。歌人でもある軍医の長田紀春は次の詠歌を記しています。「切り落とせし 兵の足をば埋めにゆく 女子学生ら 唇噛み駆ける」この南風原にも日本軍の「慰安所」があり、公娼制度の犠牲者が、さらに軍隊による性暴力の被害を受けていた。「沖縄陸軍病院南風原壕群」で亡くなった人たちの氏名が掲示してありました。戦車の残骸が飾ってありました。

南風原文化センターを後にした私たち一行は、黄金森の遊歩道を通って、唯一入壕できる20号の入り口まで行きました。他にも壕はたくさんありましたが、20号の壕だけが入れます。ここと同じような23号24号の壕に「ひめゆり隊」はいたそうです。米軍が近づいてきたので、1945年5月25日に南風原病院壕から南方へ避難を開始する。その際、医薬品を埋めて逃げたものを、後日掘り出して展示してありました。壕は、高さ1.8m、幅1.8mの大きさと、懐中電灯を消すと真っ暗で



壁が崩れやすいので、現在では壁面崩壊防止の柵がされていました。この通路の半分は2段の棚が置かれ、患者がたくさんいたそうです。南方に避難する際、歩けない患者には青酸カリが配られるという残酷なことが行われました。陸軍は捕虜となることを決して許さなかったのです。第三外科の長田紀春軍医は、町のお医者さんとして活躍された方だったので、「患者を殺すことができない」と青酸カリを捨てさせて、非常食の乾麵包を直ぐに配ったそうです。

「学徒隊」（「ひめゆり隊」だけでなく、県立第二高女の「白梅隊」など）は、日本軍と共に沖縄本島南端部に向かいました。「白梅隊」は生徒だけの56名からなる女子学徒で、6月4日東風平（こちんだ）の野戦病院が、糸満の国吉へ撤退する際「白梅学徒隊」は解散させられたが、南部の戦場を彷徨した末、国吉の野戦病院に合流して、そこで22名が亡くなっている。沖縄陸軍病院の避難壕は、糸洲と波平と伊原などに分かれたが、「ひめゆり隊」は「伊原第三外科壕」（ひめゆりの塔の立つ写真の自然壕）に入った。6月17日伊原第一外科壕入口近くに砲弾が落ち、多数死傷者がでる。6月18



日山城の本部壕が直撃弾を受け、多数死傷する。同日、糸洲第二外科壕が米軍の「馬乗り攻撃」を受け、生き埋めや負傷者が出る。

「馬乗り攻撃」とは、壕の出入り口を制圧した後、壕の上からボーリングして石油を垂らすと、壕の下奥に流れ込み、そこへ入口から火炎放射器などで火を入れ石油に引火し、奥の方にいる婦女子や子どもや女子学徒隊を窒息死させる残虐な攻撃をいう。制圧というより全滅を目指した疑いあり。6月19日、前日本部壕の直撃弾で重傷を負った広池文吉病院長が死亡し、その後を継いだ病院長が「沖縄陸軍病院の解散命令」を出す。（この資料館前の説明図には、6月18日とあるが詳細は不明）同日、上の写真の伊原第三外科壕が米軍の馬乗り攻撃にあり、多数の死傷者を出す。ここで85人（教師・学徒は46人）が亡くなる。

女子学徒は10校から555人が動員され、194人が亡くなった。当時、中学校や高等女学校へは、同世代の約一割しか進学できなかった。少年少女たち2240人が戦場動員され、うち半数近い926人が死亡した。皇民化教育を徹底して刷り込まれた少年少女たちの死は、教育が戦争に果たした役割を問いかけている。

壕から逃げ出た「ひめゆり学徒隊」の人々は、さらに南の「荒崎海岸」まで出た。当時の彼女たちの目には、米軍の戦艦で埋まった海が写っていたことでしょう。絶



望し自殺した「ひめゆり学徒散華の碑」まで歩いて行きましたが、ゴツゴツした岩肌が骨で埋まっているような感触を覚えました。こ

の岩陰で身を寄せ合い亡くなっていったそうです。

沖縄平和の旅最後は、沖縄本島南端の喜屋武（きゃん）岬です。沖縄北部からこの南端まで、戦中戦後の米軍並びに日本軍（戦後の米国追随しかしない日本政府も含む）の沖縄の人々に対する行為をつぶさに見聞きしてきました。同じ日本人として怒りしか湧いてきません。よく平気である日本人に、「人間とは何か」を問いたい気持ちでいっぱいです。ぜひ沖縄平和の旅に参加して、人間性を取り戻してくださることを願って、この紀行文を終わりにします。喜屋武岬に立つ平和の塔に願いを込めて。